

中国スキーの発展

一般社団法人 日本スノースポーツ&リゾート協議会 常務理事

河野 博明



中国スキーとの関わり

中国スキーとの関わりは1979年12月から始まり、44年が経過した。

中国でスキー用具の入手が困難な時代の1983年から2012年まで長野県スキー連盟が中心となり「中国にスキーを贈る運動」で13万台の中古のスキーをはじめストック、スキーウェア等を贈った。1998年長野オリンピック招致では中国オリンピック委員会からの強力な後押しもいただいた。2000年中国は冬季オリンピック招致に動いた。吉林省北大湖スキー場全体的計画検討会議へ片桐匡長野県スキー連盟顧問に出席依頼があり私もお供をさせていただいた。2022年北京冬季オリンピック開催決定後、阿部長野県知事がオリンピック支援を打ち出し、長野県スキー連盟も全面協力体制をとった。2022年北京冬季オリンピックがコロナ禍であったが成功裡に終了した。



施設の近代化と その発展スピード

この間の中国スキー発展を身近に感じながら、微力ではあるが関わりを持たせていただいた中で驚異的な開発スピードに驚いている。1983年からそれぞれの時代に9回の訪中で身をもって感じていた。

北京冬季オリンピックの開催地である北京市と河北省の施設はオリンピック開催目的であり、施設の近代化とスピードについては当然のことと受け止めていたが、中国スキー発祥の地、吉林省のスキー場を2023年12月に「吉林省冰雪産業博覧会 氷と雪」に招待されて現状を見せていただき、驚きの一言であった。今までの訪中では「スキー競技施設」を中心とした視察であったのである程度発展スピードは感じていた。

しかし、今回は海外資本を中心とした「リゾート開発」が中国東北部のスキー発祥の地で起きていることの驚きと、これが1980年からの10年間に「中国スキー研修団受入事業」として142名の長野県での研修成果なのか？と思うと少し嬉しさもあり複雑な思いであった。

カナダのウィスラーマウンテンリゾートかと思わせるようなリゾート開発であった。



リゾート開発された スノーリゾート

そこは地域住民の生活の場所では無く、リゾート開発だけの目的で作られたスノーリゾートである。街並み、ホテル、ゲレンデ、リフト、ゴンドラ、レストハウスと至る所でBMW、Audi、MONCLER、DESCENT等の世界各国の自動車、銀行、スキーメーカー等のロゴマークが目に入ってくる。ホテルのフロント前にはDIORのショップが併設されている。訪れる客は最新式のウェアを着用しているが、スキー、スノーボードの用品はほとんどレンタルである。ただ、サロモンステーション等の質の高いレンタルショップでの対応である。

スキーヤーの腕前はほとんどがビギナークラスで、ゲレンデ下部の広いビギナーエリアは混雑しているが、山頂からの中級、上級者コースはガラガラの状況であった。

スキー、スノーボードの目的ではあるが遊園地感覚であり、長期滞在しての楽しみとなるにはまだ時間がかかりそうである。河北省、北京近郊に比べると吉林省は中国の東北部であり、気温が低くマイナス30度以下も珍しく無い地域であり、寒さ対応も課題の一つと言える。



最後に

今回の訪中と2023年7月末の2回の全日程中、現金での支払いの場面は一度も目にする事は無かった。クレジットカードの使用も我々を含む外国人のみであり、中国の皆様はすべてスマートフォンによるアプリでの支払いであったことに、日本におけるキャッシュレスの遅れを痛感した。

河野 博明 / KOUNO Hiroaki

一般社団法人 日本スノースポーツ&リゾーツ協議会 常務理事

1951年長野県野沢温泉村生まれ。

札幌オリンピックアルペン強化選手。

1974年選手引退後家業（有）白樺取締役、2004年から2021年まで代表取締役。

1984年から1998年まで長野県スキー連盟理事、評議員、専務理事を経て、2015年から2018年まで副会長。この間、全日本スキー連盟評議員も2期務める。

1992年から1998年まで野沢スキークラブ理事長、その後2005年まで会長。

2005年から2014年まで（株）野沢温泉（野沢温泉スキー場）社長、累積赤字を一掃して経営を立て直す。